鹿児島純心女子短期大学研究紀要　第51号，145－157　2021

「世代」的な表象の手前で
－大江健三郎「飼育」における《戦争》の意味－

北山　敏秀

Before Representing ‘Generation’
－The Meanings of War in Oe Kenzaburo’s “*Shiiku*” －

Toshihide Kitayama

大江健三郎は，短篇小説「奇妙な仕事」（1957）で小説家としてデビューする。その後，1959年頃からは，徐々にエッセイなどの評論を発表する機会も増え，日本国憲法にある《主権在民》，《戦争放棄》の理念を支持する立場からの言論活動を展開していく。大江はそれらの評論で，自らを「戦後のデモクラシーの時代」において教育を受けた「戦後世代」として表象していった。「戦後」の価値をこそ訴えようとする若い「世代」と，「戦争体験」を現在との連続性のもとで捉え，現在の思想的課題にする方法を模索しようとした前「世代」との懸隔は，〈対立〉の様相を呈して前景化する。大江もまた，そうした思想状況のもとで，「戦後世代」として言論を展開することで作家としてのアイデンティティを形成していった。

本稿では，以上のようなエッセイが発表され始める前に書かれた小説「飼育」（1958）を分析することを通して，大江による「戦後世代」としての自己表象を相対化することを試みる。

Key Words:［戦後世代］［戦争体験］［自己表象］［「飼育」］［大江健三郎］

（Received September 23, 2020）

はじめに

大江健三郎は，1957年に東京大学の学生として書いた小説「奇妙な仕事」（『東京大学新聞』1957年5月）で，大学内の五月祭賞を受賞する。それに続いて，「奇妙な仕事」が平野謙によって『毎日新聞』の文芸時評欄に紹介された[1]ことをきっかけに，「他人の足」（『新潮』1957年8月号），「死者の奢り」（『文學界』1957年8月号）を発表し，小説家としての活動を始める。

以降，1959年頃からはエッセイなどの評論を発表する機会も増え，六〇年安保闘争にあたっては，「岸首相よ，みずからを恥じて退いてもらいたい」[2]という一節を含んだ文章を発表するなど，日本国憲法にある《主権在民》，《戦争放棄》の理念を支持する立場からの言論活動を展開する。自衛隊の創設や，皇太子結婚に沸くミッチーブームなど，憲法の理念に逆行するよう

＊　鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻デザイン表現コース（〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号）

な社会状況を背景に，大江は，自らの立場を「戦後のデモクラシーの時代」において教育を受けた「戦後世代」と規定するなど[3],「世代」を意識した言論を通して作家としてのアイデンティティを形成していった。

その背景としては，本論文でのちに論じるように，第二次世界大戦と自己との距離をいかに認識するかということをめぐって，「世代」間の差異が1950年代後半の思想の場で重視されていたことが挙げられる。「戦後」の価値をこそ訴えようとする若い「世代」と，かつての「戦争体験」を現在との連続性のもとで捉えようとする前「世代」との懸隔は，〈対立〉の様相を呈して前景化する。大江もまた，そうした思想状況のもとで，「戦後世代」として言論を展開することで「世代」をめぐる議論に参与していく。

一方で大江は，そこから1年ほど時間を遡って，1958年1月号の『文學界』に小説「飼育」を発表していた。「飼育」は，「戦争」の時代を背景とし，「《町》」から隔絶された「村」を舞台に物語が進められる。遠くにあったはずの「戦争」を，「村」で暮らす「僕」がいかに身近なものとして感じ取るに至るかが語り出されていく[4]。

「飼育」発表の時点で大江は，まだエッセイなどの評論をほとんど発表していなかった[5]。その点で「飼育」は，上に見たような「戦後世代」としての自己表象を，大江がエッセイなどを通してまだ読者に向けて行っていなかった時期に書かれた小説だと考えることができる。そうだとすれば，初期の大江について語るうえでしばしば指標にされる「戦後世代」という区分は，「飼育」を分析することを通して再検討することができるのではないか。

以上のことを念頭に置いて，本論文では「飼育」を，大江がまだ「戦後世代」としての自己表象を行い始める前に書かれた小説として分析する。それによって，大江の言う「戦後世代」という概念を再検討することを中心として，初期大江の言説を読み直すためのひとつの視点を提示する。

「飼育」の分析にあたっては，特に物語の結末である「書記」の死に注目する。「書記」は，「大人」の男でありながら身体的欠損によって兵士になることができないという点で，「戦争」に対して曖昧な位置に立っている。「子供」であるために兵士になることができず，のちに述べるように，「敵」と味方を区別する「戦争」の論理を内面化することもできていない「僕」もまた，「戦争」のなかに曖昧にしか自己を位置づけることができない。その類似点によって「僕」は，「書記」に対して愛憎半ばする感情を抱く。結末における「書記」の死は，「書記」が「僕」に向けて，「大人同士が話し合う時のように」「戦争」について語った直後にもたらされる。すなわち，「《町》」の役人である「書記」が，「大人」たちが作る「戦争」の場の一員であることを「僕」に明確に示したとき，「書記」の死はもたらされるのである。それによって「僕」は，「書記」と自己との差異を認識し，「書記の死体を見すて」てその場を立ち去ることになる。その「僕」の姿を描き出す「飼育」からは，書き手である大江自身における，「戦争」と自己との関係性を認識することをめぐる，アイデンティティの形成の困難そのものが描き出されていることが読み取れる。

以下ではまず，「飼育」に描き出された，「書記」に対してアンビヴァレントな感情を抱いていた「僕」が，結末において「書記の死体を見すて」るまでの過程を分析する。そのうえで，「戦争体験」をめぐる1950年代後半の思想状況について概観し，「飼育」をそのなかに位置づける。

1.「書記」と「僕」との関係性

発表当時において「飼育」に与えられた評価のひとつの傾向として，物語の結末である「書記」の死に対し，疑念が示されたことが挙げられる。

遠藤周作は，小説の面白さを指摘しつつも，「最後の黒人の死以後の結末が少しダソクすぎる感もある」[6]と述べ，また本多秋五は，約半年後に他の作品（「戦いの今日」，『中央公論』1958年9月号）と比較しながら，「『飼育』の結末にみるような，ぶちこわしの大疵もない」[7]という表現を使っている。さらに,「飼育」が芥川賞を受賞した際の選評では, 井上靖が結末を「あらずもがなの場面」[8]と指摘した。

各人とも，大江の小説に一定の高い評価を与えながらも，しかし「飼育」の結末については批判的な視点を提示している点で,「飼育」の結末が評者たちに戸惑いを与えるものであったことをうかがわせる。それらの指摘が意味するものについては,『群像』誌上の創作合評における福永武彦の発言から，その一端をうかがうことができる。

> 最後の書記が死ぬところは，ぼくはてつきり主人公の少年が，書記の義肢を橇に投げつけて殺すのかと思つていたが，そうじやないんだね。書記は偶然に，唐突に，事故かなんかで死ぬ。いつたいそのことと「僕はもう子供ではない」というのと，どういう関係があるんだろう。殺すのなら，意味が関係づけられるが，これではどうも筋として必然性がないようだ。だいたい書記というのはあまり重要でない人物だろう。[9]

ここで福永は,「火葬」された「死者」のことを思い出し「僕は恐かった」と語られる冒頭と,「僕」が「死者」に「急速に慣れてきていた」と語られる結末とが物語の枠を作っていることを指摘している。そのような枠組みにおいて読むなら,「僕はもう子供ではない」という語りは,「死者」に「慣れ」ること，つまり「戦争」で人が死ぬことを受け入れられるようになり,「僕」が「戦争」を内面化したことを示すものとして解釈できるようになるだろう。そこで福永は,「少年」の意思とは無関係に,「書記」が「偶然に」「事故」で死ぬという展開になっているために,「少年」の心理的成長を軸とした物語として読み得る可能性が最後にズラされてしまうことに，戸惑いを覚えているようである。

また平野謙も，物語の要約として「県庁（ママ）の書記も不慮の死をとげる」というところにまで言及したうえで,「戦争の惨禍をしらぬ少年の心に，急にそれが自覚されることによって，少年は少年の世界に決別しておとなの世界にはいってゆく，という主題だ」と述べている[10]。ここでも「書記」の死は,「少年」に現実を突きつける要素として解釈されている。

このように同時代評においては,「飼育」というテクストは,「大人」の介在によって「黒人兵」との交流が断ち切られ,「戦争」を現実的に認識していくことになる「少年」のイニシエーションの過程を描いた物語として読むということが，ひとつの読解の枠組みとして提示されている。そのとき「書記」の死は,「死」に「急速に慣れてきていた」という，テクストの末尾と冒頭を比べたときの,「僕」の心理的成長を示す要素として意味づけられることになる[11]。

本論文では，先行研究ではあまり取り上げられてこなかった「書記」の存在に注目し，発表

当時においては「ダソク」とされ，その後も成長譚の構成要素として読まれてきた「書記」の死という結末について論じることで，「飼育」を読み直していく[12]。

ノーマ・フィールドが,「村と《町》の間を行ったり来たりする書記」を「真に媒介者らしい人物」と評したように[13],「書記」は，二面的な役割を持つことにおいてこそ,「僕」にとって意味を持つ存在である。

「指令」の伝達役として「《町》」と「村」を行き来する「書記」は,「黒人兵」に関するいかなる「指令」を持ってくるのかをめぐって，常に「僕」に「不安」をかきたてながら，しかし何の「指令」も下さないことで「僕」を安堵させるということを繰り返す。

「黒人兵」を監禁＝「飼育」する「地下倉」から「書記」が「顔をうなだれて出て来るのを見」ると,「僕の躰」は「なだれてくる失望」に「ひた」され,「しかし，彼のあとに続いて黒人兵の死体が運び出されて」は来ないと分かると,「僕は吐息をつ」く。「僕」にとどまらず,「あらゆる子供たち」が,「毎朝」,「気がかりな指令を持つた書記がやつて来ないこと」を祈っている。

もうひとつの「書記」の特徴として,「右足」が「義肢」であるということが挙げられる。それについては，奥間勝也が次のように述べている。

> 「書記」の「しるし」である片足がないのはなぜだろうか。［中略］
> 「書記」を考察していくと，可能性の一つとして「書記」は戦争から帰って来た兵士ではないかという風に読めてしまう。「書記」は戦闘によって片足を失い，その結果，義肢での生活を余儀なくされているのではないか。そのように負傷した帰還兵の「書記」を考えた場合，彼の身体はすでに戦争の記憶が刻み込まれているといえる。[14]

奥間は，このように述べる根拠として,「書記」が，戦場でタバコの代用品とされた「イタドリの葉」を使用していること,若くて丈夫な肉体を持っていること,軍隊生活を思わせる「命令的な口調，一種の下級官僚的な尊大な口調」になることを挙げている。奥間の主張を否定することはできないが，しかし，テクストからは，奥間の言うように「書記」がすでに戦場を体験した「帰還兵」であるのか，あるいは身体的欠損を抱えているために「戦争」に行くことができない人物であるのかは，判読が難しい。

ただし,「帰還兵」ではないとしても，少なくとも現時点で「書記」が「戦争」に兵士として参加することができないのは確かだろう。そのように,「戦争」に参加したくても参加できないという点で,「書記」は，兵士を中心とする「戦争」の物語から排除される可能性に常に晒されている。そしてその点に,「書記」と「僕」との類似性が発生する。

「僕」は「書記」に対し，次のように両義的な感情を抱いている。

> 僕は書記が丈夫な右足と義肢と，一本きりの松葉杖で山道を跳ねて来るのを見るのが好きだつたが，椅子に坐つている書記の義肢は《町》の子供たちと同じように，きみが悪くて陰険だつた。

まずは,「好きだつた」という感情から検討しよう。

そのとき「僕」が目にするのは,「丈夫な右足と義肢と,一本きりの松葉杖で山道を跳ねて来る」という,「右足」に欠損を抱えた,「戦争」に参加できない者としての「書記」の姿である。「書記」がひとりで「山道を跳ねて来る」とき,「書記」は自らの身体の動きに集中せねばならないだろう。ここで「書記」は,「《町》」の役人であるよりも,不自由な身体を抱えた個人としての意味を強くする。

一方で「書記」は,「町役場」の職員でもある。その,「《町》」に属する「書記」に対し,「僕」は「きみが悪くて陰険だつた」という感情を抱く。「書記」とは,「村へたびたび《町》からの通知を伝えに来る男」に他ならず,時には「県」にまで繋がり,「軍隊」に関わる情報ももたらす存在である。その点において,「山やまの向うの都市」の「伝説のように壮大でぎごちなくなつた戦争」と結びつき,その「戦争」を,より現実的にした形で携えて「僕」に近づいてくるのが「書記」である。そうした,「町役場」の職員としての「書記」に対し,「僕」は「気味が悪」いと感じる。

すなわち,「僕」が好意を抱くのは,「大人」でありながら,兵士を中心とした「戦争」の文脈から外れる者としての「書記」である。そのとき「書記」は,再び「戦争」を,「町役場」が介入する現実的な政治としてではなく,「伝説」に近いものとして「僕」に感じさせる。「書記」は「僕」にとって,そのように,「戦争」を現実化する作用と「伝説」化する作用のはざまに自らの身体を置く存在なのである。そこに,「戦争」に参加できない者(「子供」)として,「戦争」を「伝説」のように感じている「僕」が,「書記」に対して親近感を抱く要因が生じる。

「僕」は,「戦争」に対する次のような認識を持つ者として描かれている。

> 「あいつをどうするんだろう,広場で撃ち殺すのかなあ」
> 「撃ち殺す?」と驚きに息を弾ませて兎口が叫んだ。「正真正銘の黒んぼを撃ち殺す」
> 「敵だから」と僕は自信なく主張した。
> 「敵,あいつが敵だつて?」と兎口は僕の胸ぐらを摑み脣の割れめから唾液を僕の顔いちめんに吐きかけながら声を嗄れさせて,どなりちらした。「黒んぼだぜ,敵なもんか」

ここで「兎口」は,腕力を使ってまで「黒人兵」は「敵」ではないと「僕」に言い聞かせている。そのことは,「村」の「子供」として「《町》」からの差別を受けてきたという境遇,また,ここに「脣の割れめ」という言葉があることからも分かるように,「兎口」における身体的な欠損(兎唇)が,「黒人兵」という被差別的な位置にある人物への共感を「兎口」に呼び起したことを示唆している。

一方で「僕」は,「黒人兵」が「敵」かどうか,「自信」を持って判断することができない。誰が「敵」かという「戦争」における判断を「兎口」ほどには内面化できておらず,「僕」は「敵」と味方を区別する「戦争」の論理に対し,不確定的な態度を取ることしかできない。しかし「僕」はこのあと,腕力を使った「兎口」の主張を受動的に聞き入れるように,「敵」ではない「黒人兵」を「獣のように飼う」ということに,愉悦的な快楽を覚えていくことになるのである。

そうした,「子供」であるため兵士になることができず,「敵」と味方を区別する「戦争」の

論理もうまく内面化できない「僕」にとって，兵士を中心とした「戦争」の物語から外れる位置にいる「書記」は，「戦争」に対して曖昧な距離にいるという自己との類似性において，親近感を抱かせる存在なのである。

「書記」の死という結末への流れは，この「僕」の好意的な感情から「書記」が離れていってしまう過程とともにある。どのような過程なのか，以下でたどってみよう。

2.「戦争」に対するポジショニングの問題

「書記」が物語の結末で命を落としたとき，「僕」は次のように語る。

> 僕は子供たちに囲まれることを避けて，書記の死体を見すて，草原に立ちあがつた。僕は唐突な死，死者の表情，ある時には哀しみのそれ，ある時には微笑み，それらに急速に慣れてきていた，村の大人たちがそれらに慣れているように。黒人兵を焼くために集められた薪で，書記は火葬されるだろう。僕は昏れのこつている狭く白い空を涙のたまつた眼で見あげ弟を捜すために草原をおりて行つた。

ここで「僕」は，「黒人兵を焼くために集められた薪で，書記は火葬されるだろう」と推測している。「黒人兵を焼くために集められた薪」が残っているのは,「書記」が「黒人兵」の「火葬を中止させる指令を持つて来た」からに他ならない。自らが持ってきた「指令」によって自らの「死体」が焼かれてしまうことは，「《町》」の職員としての「書記」が「戦争」というシステムのなかにいることを，この結末において，改めてアイロニカルに表現している。

「黒人兵」の「火葬を中止」するという「書記」の「指令」によって，「大人たちは，黒人兵の死体が腐敗するのを遅らせるために谷間の廃坑へそれを運びこみ，山犬よけの柵を作」ることになる。「黒人兵」の「死体」を保存する「指令」が出た理由は明らかにされないが，「大人たち」が行う作業は，「県」から「《町》」へ，そして「書記」を介して「村」へ，という伝達の体系のなかにおけるものである。そして,その「指令」に従って「黙りこんで」「作業を続け」る「大人たち」をよそに,「子供らは気が狂つたように陽気に叫びたてながら駈けまわつて」おり，「子供ら」はその「作業」に参加しない。しかし，「僕」は，その「子供ら」のなかにも入ることができないのだ。

「黒人兵」をどう認識するかをめぐり，「僕」は「兎口」と次のように仲たがいを起こす。

> 「臭うなあ」と兎口はいつた。「お前のぐしやぐしやになつた掌，ひどく臭うなあ」
> 僕は兎口の闘争心にきらめいている眼を見かえしたが，兎口が僕の攻撃にそなえて，足を開き，戦いの体勢を整えたのも無視して，彼の喉へ跳びかかつてはゆかなかつた。
> 「あれは僕の臭いじやない」と僕は力のない嗄れた声でいつた。「黒んぼの臭いだ」
> 兎口はあつけにとられて僕を見守つていた。僕は脣を噛みしめて兎口から眼をそらし，兎口の裸の踝を埋めている，小さく細かい葉の草の泡だちを見おろした。兎口は軽蔑にみちて肩を揺り，勢よく唾を吐きとばすと，喚きたてながら橇の仲間へ駆け戻つて行つた。

「僕」は，自らの「掌」の「臭い」を「黒んぼの臭いだ」と主張しているように，「黒人兵」と自らの身体が一体化したような感覚を覚えている。一方で「兎口」は,「僕」が「村」に「充満してい」ると語る「黒人兵の重い死体」の「臭い」や，「耳に聞えない叫び」を感じ取ることはない。「兎口」は「僕」への共感を示すことなく，「墜落した黒人兵の飛行機の尾翼」を自分たちの遊び道具にする「子供ら」のもとへと「駆け戻つて行」く。

その点で,「指令」に黙って従い「黒人兵の死体」を保存するための「柵」を作る「大人たち」,および「尾翼」を自分たちのものにする「子供ら」の双方に,「僕」はなじめない。

上に引用した,「兎口」との隔たりを表現した場面の直後には,「僕はもう子供ではない，という考えが啓示のように僕をみたした」という一節が置かれている。しかし,だからといって,「僕」は自らを「大人」だと主張しているわけではない。むしろ,そのどちらでもない位置に「僕」が立たされたということを，この一節は表現しているだろう。

物語の後半,「黒人兵」が殺され,「僕」の手が砕かれるという出来事のあと，再び目覚めた「僕」は,「ねばねばした袋」，あるいは「大人たち」が「怪物」に変わるという表現とともに,「理解を拒」む無定形なものとして周囲の状況を認識する。そのような「僕」と,「書記」とのあいだに,「戦争」という言葉をめぐって次のようなやり取りが行なわれる。

> 「戦争も，こうなるとひどいもんだな。子供の指まで叩きつぶす」と書記がいつた。
>
> 僕は息を深く吸いこみ黙つていた。戦争，血まみれの大規模な長い闘い，それが続いているはずだつた。遠い国で，羊の群や，刈りこまれた芝生を押し流す洪水のように，それは決して僕らの村へは届いてこない筈の戦争。ところが，それが僕の指と掌をぐしやぐしやに叩きつぶしに来る，父が鉈をふるつて戦争の血に躰を酔わせながら。そして，急に村は戦争におおいつくされ，その雑踏の中で僕は息もつけない。
>
> 「そのあげく終りが近いようだがな」と書記は大人同士が話し合う時のように重おもしくいつた。「市の軍隊に連絡しても混乱していて通じない，どうしていいかわからない」

このように「書記」は,「僕」が陥った状況を,「戦争」という言葉によって意味づける。そして,その言葉を受けて「僕」自身も,「決して僕らの村へは届いてこない筈の戦争」が，自らの「指と掌をぐしやぐしやに叩きつぶしに来る」までに身近に入り込んでいるという認識を持つに至る。

それまでは,「指令」の伝達者としての役割に徹し,「戦争」の中で自らの判断を下すことのなかった「書記」が，唐突に，これが「戦争」なのだと言い,「僕」が陥った状況を「戦争」として意味づける。つまり，それまで外部からの「指令」を「村」に運び込んでくるだけの存在だった「書記」は,「戦争」を自らの言葉で，内面化した形で語る。そのように「書記」は,自ら進んで「戦争」と自己との関係性を言語化し，その関係性の中へ入り込み得る存在であることを，ここで明らかにする。

そのとき,「僕」にとって重要になるのは,「書記」が「《町》」の吏員として，つまり，国家と繋がり,「きみが悪くて陰険」な存在として発した「戦争」という言葉を,「僕」がどれほど内面化し得るかということだ。その点において,「僕」と「書記」との差異が浮かび上がって

くることになる。

しかし,「僕」に「戦争」という言葉を手渡した「書記」が死ぬことによって，その「戦争」に対する自らの立場をどのように意味づけるかは,「僕」自身にゆだねられることになる。そのように,「戦争」に対するポジショニングの困難さが「僕」に突きつけられることにこそ,「飼育」の結末の意義が，より多く宿されている。

物語の結末が,「僕」が「書記の死体を見すて」て立ち去るという一節で閉じられることは，その先に「僕」が，自己と「戦争」との関係性を，新しく自らの言葉で思考していく可能性があることを示唆しているのではないだろうか。その，未だ言語化できない状況と向き合う不安のなかで,「僕」は，それまで常に行動をともにしていた「弟」を「捜」しにいく。「僕」は，中間者として近しい感情を持ち得た「書記」と別れ，自らの「戦争」との距離の取り方を模索すべく，その場を立ち去っていくのだ。

3.「戦争体験」をめぐる1950年代後半の思想状況

それでは,以上に見たような「飼育」の結末は,同時代においていかなる批評性を持ったのか。以下では，1950年代後半の「戦争体験」をめぐる思想状況を概観し，そのなかに「飼育」を位置づけていく。

1946年から48年にかけて行なわれた極東国際軍事裁判のあと,1950年代後半の日本において,「戦争責任」についての議論が改めて浮上する。その議論を成立させるための前提として,「戦争」と自己との距離をいかに認識するかという問題が，当時の思想的課題として重視された。

その画期は，1956年1月号の『中央公論』に掲載された鶴見俊輔の「知識人の戦争責任」あたりにあると思われる。そこで鶴見は,「十五年戦争の責任についての議論が占領軍によって代行されたままでおいてあるということで，私たちの思想史に不自然な接骨の部分ができた」とし，その「不自然な接骨の部分」を「もう一度，決断をもって折ってしまい，自分の手でつぎ直すことが必要である」と述べている[15]。

この鶴見の論説は，東北大学農学部翠生会の同人誌『コチレドン』の1955年3月号に掲載された，猪狩正男の「烈しい怒りをこめて」と題する文章を参照することで始められている。猪狩正男はその文章で,「戦中」と「戦後」で変節し,しかも「戦時中行った種々の行動について」,「単なる罵倒に終」わるような「批判の仕方」しかしない「知識人」に対する「怒り」を，自らの従軍の体験をもとにぶつけている。

鶴見は，この同人誌に掲載された一〝大学生〟の文章を拾い上げ,「筆者たち二十代後半の青年は，戦前世代と戦後世代のあいだのミゾにおちて，もがいている」とし,「私は猪狩正男の考え方が，正しいと思う」と述べている[16]。ここで鶴見は，それまで見過ごされていた，いまだ思想形成の過程にある青年期に戦争の場に投げ入れられた人々に目を向けることを方法とした,「戦争責任」についての議論の必要性を訴えている。

また，そうした人々を指す「戦中派」という用語が出始めたのも1956年のことである。座談会「戦中派は訴える」[17]を掲載した『中央公論』1956年3月号の編集後記では,「戦中派は一体何を考えているのか」,「この世代が重い口を開くことを期待せずにはいられません」と述べら

れている[18]。

こうした,「世代」間の差異を意識したうえで共通の議論の場を作ろうとする動きは，竹内好や，自身が「戦中派」に当たる橋川文三らの考察を通して，より体系化されていく。そこでは，まずは埋められるべき「世代」の差異が意識されることになる。

大江の「飼育」が発表されたあと，1959年7月から1961年6月にかけて叢書『近代日本思想史講座』（筑摩書房，全８巻）が刊行された。その第7巻「近代化と伝統」（1959年11月）に,「戦争体験」の現在への連続性を捉える立場から,「「近代の超克」は思想としては今日なお生きて」いるという主張を含む論説「近代の超克」を掲載した竹内好は，叢書の前書きで次のように述べている。

> 敗戦後もう十四年たった。間もなく思い出の八月十五日がまたやってくる。思い出－というのは私たち，つまりこの講座の編集同人および執筆協力者たちにとっての思い出なのだが，一方では，戦争を経験せずに戦後に生まれそだった世代が，そろそろ青年期に達しようとしている。彼らにとっては敗戦は，私たちとおなじ意味をもった事件であるはずはない。［中略］
>
> 私たち戦前派と，戦後派の若い人々の間に生じ，また拡大しつつある思想（知識でない）の断層は，私たちの手で埋めなくてはならない。まず埋めることが，共同してヴィジョンをそだてるための前提条件である。そしてそのための必要条件が，いまようやく出そろった，と私たちは考える。[19]

この文章では,「世代」という観念が強く意識されている。「戦争を経験せずに戦後に生まれそだった世代」とのあいだにある「拡大しつつある思想」の「断層」を「埋める」ことが,「共同してヴィジョンをそだてるための前提条件」であるということが,「戦前派」を自称する編者によって述べられている。竹内はまた，少しあとに発表した別の文章でも,「私は自分と戦後世代の間にかなり深い割れ目があることを感じる。［中略］それが戦争処理（とくに思想的処理）の未済部分に関係しているからである」[20]と述べている。

竹内とともに『近代日本思想史講座』の編集に関わった丸山眞男は，刊行までには「編集部の相談を受けて一応の草案を基としてテーマや編別の検討をはじめてからでも三年以上」がかかり，そのあいだに,「たえずプランが練り直され,「近代日本思想史」という企画に「想像しがたい困難と障害」があったことを指摘している[21]。丸山は，どこに「困難と障害」があったのかを具体的に述べているわけではないが，その背景には，1950年代後半という「戦争体験」の質をめぐる「世代」間の差異が重視されつつある時期において，どこに視点を定めれば「近代日本思想史」という観点が可能になるのかという課題があったことが想定できる。

1950年代後半における「戦中派」と「戦後派」（戦後世代）との対立が露わになった例としてよく言及される[22]1959年の座談会「怒れる若者たち」で，石原慎太郎は次のように発言していた。

> 戦争というのは，要するに人間の存在にとつて極限的な状況で，その中でそれを掴むこ

とは案外イージーなんですよ。ところが今日では人間の存在がはるかに希薄になつている。戦争中よりも現代のほうが人間の存在は希薄だと思うんですよ。［中略］
今になつてまだ戦争ばかり書いて，どうなるんですか。[23]

『近代日本思想史講座』の刊行においては，この石原の発言に表れるような，いわゆる「戦後派」が示す，「戦争」の経験を過去のものとして認識し，時間的にあとから現れたものにこそ価値を見出そうとする性急な態度を相対化する思想の構築が，「戦前派」を自称する編者たちによって目指されたと考えられる。丸山の言に従えば，そこでは，少なくはない時間と労力をかけて，「世代」という観念の前景化がなされていったのである。

このように，「戦争体験」をめぐって「世代」という観念が注目されるなかで，大江もまた，「戦後世代」と「戦中派」との論争という形を取った先述の座談会「怒れる若者たち」に参加するなど，議論と無関係ではいられなかった。

大江はその座談会で，橋川文三が，「戦争というものを一九三一年から四五年までの年表のなかへ投げ込まれた戦争というふうにとると，戦争は終つたということは自明だけれども，現代の思想の問題としてみると果してどうなのかという疑問が出てくると思うんだ」と述べたのに対し，「現に，もちろん，戦争は終つてますよ。どんな立場を採ろうと，戦争は終つている」，「はつきり将来の戦争というなら，かなり線がハッキリするわけです」[24]と反論している。ここには，自身が身を置いた過去の戦争を振り返りながら「戦争体験」を現在の問題として捉える思想的方法を模索する橋川と，冷戦構造のもとで現実に起こり得る戦争をこそ重視しようとする大江との，「戦争」をめぐる観点の食い違いが現れている。

そうした思想状況のなかでこそ，大江は，先に触れたエッセイなどの評論における「戦後世代」としての自己主張を，作家としてのアイデンティティ形成の試みとして展開していくのである。

一方で「飼育」は，先述の「戦中派」という用語が提出されてから，『近代日本思想史講座』が刊行されるまでの1957年に執筆・発表されたテクストである。つまり，上記の竹内による前書きにあったような，共通の「ヴィジョン」をいかに作るかという「戦争体験」と「戦後」の交わりを探る思想的試みが，いまだ体系的に提示されず，無定形なまま思想の場に意識されつつあった時期に，「飼育」が発表されたと考えることができるのだ。

「飼育」の語り手である「僕」にとって，物語の前半において「戦争」は，遠くにある「伝説のように壮大でぎこちなくなつた」ものとして認識されている。しかし物語の後半，「父」によって「僕」の「左掌」が，「僕」を捕らえる「黒人兵」の「頭蓋」もろとも「打ち砕かれ」たあと，その傷跡に「戦争」の実質を感じ取った「僕」は，「決して僕らの村へは届いてこない筈の戦争」に「村」が「おおいつくされ」ると認識するに至る。

ここには，「僕」の認識に「戦争」が食い込んでくるさまが語られている。このことは，「飼育」の書き手である大江にとって，あの「戦争」と自己との距離についての認識は，「もちろん，戦争は終つてますよ」という言葉で済ませられるようなものではなく，現在において模索しなければならない課題として感じられていたことを示すのではないか。

「僕」の姿には，「戦争」と自己との距離をいかに認識するかを問うことから生じる葛藤が，しっ

かりと織り込まれている。それは，先に見たような，「戦争」との距離をめぐる「世代」間の差異のもとに表象されることになる「戦後世代」という規定をあらかじめ相対化し，その規定の手前において，すでに「戦争」と個別的に向き合う思想の胎動がしっかりと存在したことを伝えている。

おわりに

以上，本論文では，1950年代後半の「世代」をめぐる思想状況を背景として提示された，大江による「戦後世代」としての自己表象を差異化する要素を，「飼育」から読み取ってきた。

大江は，先に言及した第一エッセイ集『厳粛な綱渡り』の裏表紙に，「ぼくはつねに戦後世代の声でかたってきた。すくなくとも，ぼくはこの本が日本の戦後世代の，500頁をこえる最初のエッセイ集たることを広告する権利を有する」という言葉を記している。また，同書の巻頭に大江は，「《戦後世代のイメージ》」と題するエッセイを置く。こうした，大江による「戦後世代」としてのアピールは，『厳粛な綱渡り』が2度文庫化されている（文春文庫：上巻1975年6月，下巻同年7月，講談社文芸文庫：1991年10月）ことを踏まえても，たとえば「戦後民主主義」といった政治的立場との関わりにおいて広く流布していることが考えられる。

「エッセイに端的に表現される大江健三郎の戦後民主主義そのものと言ってよいような発言が，どんな内面の葛藤を経て出てきたかというプロセスもあわせて考えなければいけないと思う」という指摘自体はすでになされているが[25]，本論文はそうした，大江の言説が持つ複雑さに注目する視点を，「飼育」の読解を通して具体的に研究に生かしたものとして位置づけることができる。

大江文学のその後の展開に注目するなら，たとえば大江は，1965年6月刊行の『ヒロシマ・ノート』（岩波新書）や1970年9月刊行の『沖縄ノート』（岩波新書）において，いまなお続く被爆者の苦痛や，沖縄に集中され続ける米軍基地の問題について思考していく。それらは，言うまでもなくかつての「戦争」がいかに現在まで継続しているのかを描き出す作業であり，大江によるその作業は，数十年を経て現在にまで続いている[26]。

そのように考えれば，「飼育」はすでに，1945年の敗戦を断絶と見る視点によって「戦後」の価値を訴えることよりも，むしろ，「戦争」をいかに現在の自己と関わる問題として考えるかという思想的課題を窺わせる点で，その後の大江文学の可能性を示唆している。

1　平野謙「文芸時評」（『毎日新聞』1957年6月19日）。
2　大江健三郎「民主主義の怒り－一青年の意見－」（『サンデー毎日』1960年6月５日号）。
3　大江健三郎「無分別ざかり」（『週刊朝日』1959年1月4日～1959年2月22日号），連載第8回（最終回）。なお，このエッセイは，大江健三郎『厳粛な綱渡り　全エッセイ集』（文藝春秋新社，1965年3月）に収録されるにあたって，「《戦後世代のイメージ》」に改題されている。
4　以下，「飼育」の引用は，すべて初出誌（『文學界』1958年1月号）掲載の本文による。その際，旧字は新字に改め，仮名遣いは本文のままとした。

5　大江の第一エッセイ集『厳粛な綱渡り』（前掲）に収録されているエッセイのうち，最も早い時期のものは「徒弟修業中の作家」（原題:「回顧一年－これからどうする－」,『朝日新聞』1958年2月2日）である。

6　遠藤周作「大江の「飼育」は力作　新年号の創作」（『北海道新聞』1957年12月23日）。

7　本多秋五「将来を卜する兆候　大江健三郎の暢びる筆　文芸時評【その2】」（『図書新聞』1958年8月23日）。

8　井上靖「いっぱいの初々しさ（芥川賞選評）」（『文藝春秋』1958年9月号）。

9　加藤周一・中村真一郎・福永武彦「創作合評」（『群像』1958年2月号）。

10 平野謙「今月の小説ベスト３」（『毎日新聞』1957年12月25日）。

11 こうした読みは，一條孝夫『大江健三郎　その文学世界と背景』（1997年2月，和泉書院）などでも繰り返されている。

12 近年の研究では，この「書記」の死に対し，テクスト全体と関わらせながら読み直す試みが提示されつつある。奥間勝也「告発するテクスト－大江健三郎「飼育」をめぐる視線と欲望の交錯－」（『琉球アジア社会文化研究』第12号, 2009年11月）は, この結末から「《町》」と「村」との権力関係を反転させる契機の刻印を読み取る。高橋由貴「火葬される「書記」の死－大江健三郎「飼育」における戦争」（『国文学解釈と鑑賞』2010年9月号）もまた,「飼育」という「一つの物語」を「統合」する序列関係の「反転」の連続のなかに「書記」の死を位置づけている。村上克尚『動物の声，他者の声　日本戦後文学の倫理』（新曜社，2017年9月，149～150頁）は，自らのうちに「差異を呼び込」み,「黒人兵」という「言葉を奪われたもの」への通路を開く可能性を持つ「子どもたち」に対し, その可能性を拒否した「大人への処罰」として，結末に対する読みの可能性を示している。本論文は，これらの論考に学びつつ,「飼育」の結末について改めて論じながら，この小説と同時代の「戦争体験」をめぐる思想状況との関係性について考察する。

13 ノーマ・フィールド「ネイティヴとエイリアン・汝と我－大江健三郎の神話・近代・虚構－」（島弘之訳，『文學界』1989年1月号）。

14 前掲，奥間「告発するテクスト」。

15 鶴見俊輔「知識人の戦争責任」（『中央公論』1956年1月号）。

16 前掲，鶴見「知識人の戦争責任」。

17 遠藤周作・大宅壮一（司会）・小林洋子・月丘夢路・丸山邦男・三輪輝光・深尾庄介「戦中派は訴える」（『中央公論』1956年3月号）。

18 福間良明『「戦争体験」の戦後史』（中公新書，2009年3月，102頁）も，この座談会「戦中派は訴える」, および,『中央公論』翌月号に掲載された村上兵衛「戦中派はこう考える」に,「戦中派という言葉」が「社会的に流通するようになった」契機を認めている。

19「講座をはじめるに当って」（『近代日本思想史講座Ⅰ』筑摩書房，1959年7月，1，4頁）。この文章の末尾に,「この稿は家永三郎，小田切秀雄，久野収，竹内好，丸山真男の共同討論をもとにして，竹内好の責任でまとめた」とある。

20 竹内好「戦争体験の一般化について」（『文学』1961年12月号）。

21 丸山眞男「企画･編集にあたって（近代日本思想史講座）」（『近代日本思想史講座･内容見本』

筑摩書房，1959年6月）。引用は，『丸山眞男集』第16巻（岩波書店，1996年12月，228～229頁）より。

22 たとえば，小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉　戦後日本のナショナリズムと公共性』（新曜社，2002年10月，562頁），山本昭宏『教養としての戦後〈平和論〉』（イースト・プレス，2016年8月，71～72頁）など。

23 浅利慶太・石原慎太郎・江藤淳・大江健三郎・橋川文三・村上兵衛「怒れる若者たち・座談会」（『文學界』1959年10月号）。

24 前掲，浅利・石原・江藤・大江・橋川・村上「怒れる若者たち・座談会」。

25 井上ひさし・イ・ヨンスク・上野千鶴子・奥泉光・川村湊・古処誠二・高橋源一郎・成田龍一『戦争はどのように語られてきたか』（朝日新聞社，1999年8月）での成田龍一の発言。引用は，改題後の朝日文庫版『戦争文学を読む』（2008年8月，244頁）より。

26 たとえば『定義集』（朝日新聞出版，2012年7月）では，広島や長崎の「被爆」の問題は2011年の福島第一原発事故との関わりから，また，沖縄の米軍基地については辺野古移設問題との関わりから考察されている。